「Kabayaki」
データベーススパイダ
for Linux

インストールおよび
取扱説明書
Version 1.0.0

はじめに 1

動作環境 1
サーバー側 1
クライアント側 1
対応データベース 1

第 1 章 インストール 3

DB スパイダの入手 3
DB スパイダの動作に必要なソフトウェア 3
DB スパイダのインストール 4
kabayaki-dbspider パッケージのインストール 4
DB スパイダを動作させるための設定 4
license ファイルのコピー 4
環境変数の設定 4

第 2 章 Kabayaki Enterprise 管理画面 5

サーバー環境情報 5
インデックスの追加 8

第 3 章 DB スパイダ管理画面 9

DB スパイダの設定 9
データベース指定 9
テーブル情報取得 12
テーブル・列選択 13
検索結果一覧画面設定 15

第 4 章 検索用テンプレート 17

検索ページテンプレート 17

第 5 章 アンインストール 19

DB スパイダと関連パッケージの削除 19
kabayaki-dbspider パッケージのアンインストール 19

はじめに

動作環境

「Kabayaki」データベーススパイダ (以後、DB スパイダと表記) を動作させるサーバー側の動作環境と、Kabayaki Enterprise で検索した結果を表示させるクライアント側の動作環境は以下の通りです。

サーバー側

OS:

- Red Hat Linux 7.3 / 8.0 / 9.0
- Red Hat Enterprise Linux 2.1 / 3.0 / 4.0

Web サーバー :

- Apache 1.3.x
- Apache 2.x

クライアント側

Web ブラウザ

- Netscape Navigator 7
- Microsoft Internet Explorer 5.5
- Microsoft Internet Explorer 6

対応データベース

- MySQL 4.0.24
- PostgreSQL 7.4.8
- Oracle 9i Database Release 9.0.1

表 1 動作実績のある組み合わせ

	MySQL	PostgreSQL	Oracle
Red Hat 7.3	○		
Red Hat 8.0	○		
Red Hat 9.0	○	○	
Red Hat Enterprise 2.1	○		○
Red Hat Enterprise 3.0	○	○	
Red Hat Enterprise 4.0	○	○	

使用したデータベースサーバーは、Red Hat Enterprise 3.0 上の MySQL 4.0.24 と PostgresSQL 7.4.8、Windows 2000 上の Oracle 9i Database Release 9.0.1

第 1 章　インストール

DB スパイダの入手

DB スパイダ 一式は以下の URL からダウンロードできます。

http://www.kabayaki.jp/portal/dw/

DB スパイダの動作に必要なソフトウェア

DB スパイダを動作させるためには、Kabayaki Enterprise がインストール済みであることに加えて、以下のうち少なくとも 1 つがインストールされている必要があります。

- DBD::mysql バージョン 2.9008
  mysql-client と mysql-devel パッケージのインストールが必要
- DBD::Pg バージョン 1.43
  postgresql-devel と postgresql-lib パッケージのインストールが必要
- DBD::Oracle バージョン 1.16
  Oracle クライアントのインストールが必須

mysql、PostgreSQL、Oracle のデータベースサーバーは、Kabayaki Enterprise および DB スパイダのインストールされているサーバーと同一であっても、別であってもかまいません。サポート対象のデータベースサーバーについては、「はじめに」を参照してください。

DB スパイダのインストール

kabayaki-dbspider パッケージのインストール

kabayaki-dbspider パッケージのインストールは、スーパーユーザーの権限で実行します。

kabayaki-dbspider を新規にインストール

```
# rpm -ivh kabayaki-dbspider-1.0.0-1.i386.rpm
```

以上で、DB スパイダと必要なソフトウェアのインストールは完了しました。続いて、DB スパイダを動作させるための設定をします。

DB スパイダを動作させるための設定

license ファイルのコピー

kabayaki-dbspider パッケージを購入すると、タイムインターメディア社からライセンス用の license というファイルが送付されます。このファイルを /usr/share/kabayaki/license に手動でコピーしてください。一部の電子メールソフトウエアでは、添付された license のファイル名が license.dat となってしまうことがあります。その場合は必ず license と名前を変更してください。

```
# cp license /usr/share/kabayaki/license
```

環境変数の設定

Oracle を使用する場合は、環境変数 NLS_LANG、ORACLE_HOME を設定する必要があります。データベースの管理者と相談の上、適切な値を設定してください。

第 2 章　Kabayaki Enterprise 管理画面

この章では、Kabayaki Enterprise 管理画面の中で、DB スパイダがインストールされることによって、追加される設定について記述します。

DB スパイダがインストールされていない Kabayaki Enterprise に共通する機能については、『Kabayaki エンタープライズ版 for Linux　取扱説明書』を参照してください。

サーバー環境情報

Kabayaki Enterprise をインストールしたホストに関する情報を表示します。また、検索および検索結果の画面のデザインを変更できます。管理画面の左側に表示されるメニューの「サーバー環境情報」ボタンをクリックすると、この「サーバー環境情報」画面が表示されます。

DB スパイダがインストールされると、以下の項目が影響を受けます。

検索ページテンプレートタイプ

検索と検索結果の画面の外観を選択できます。enterprise はインストールした直後と同じ画面になります。
DB スパイダがインストールされていると、enterprisemix というテンプレートがここに追加されます。コンテンツ種別が「DB」のインデックスと、

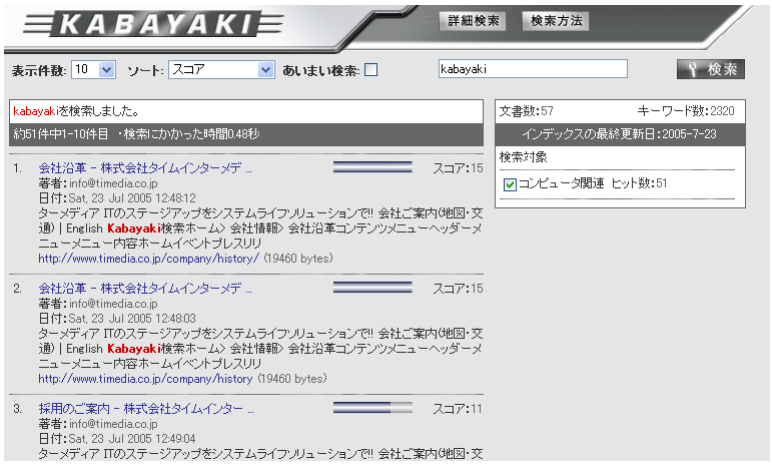
ファイルまたは Web を対象とするインデックスを混在させて検索結果を表示したい場合に使用します。

「保存」ボタン

「保存」ボタンをクリックすると、検索ページテンプレートタイプの設定が保存されます。

検索テンプレートが使用された検索結果画面

enterprise テンプレート：



enterprisemix テンプレート：

enterprisemix テンプレートは、ファイルや Web を対象とするインデックスとデータベースを対象とするインデックスが混在した環境で、両方の種類のインデックスを一度に検索して結果を表示できるようにするために、共通の項目であるタイトルと文書の URL のみを表示するようになっています。

第 3 章で説明する DB スパイダ管理画面では、検索結果画面に表示する項目を指定できます。その内容は、「enterprisedb- *インデックスの内部名*」という名前のテンプレートに反映されます。たとえば、インデックスの内部

名が postalcode という名前のインデックスをデータベース用に作成し、DB スパイダ管理画面で設定を済ませて「保存」ボタンをクリックすると、enterprisedb-postalcode という名前のテンプレートが自動的に生成されます。

enterprisedb-*インデックスの内部名* テンプレート：

「enterprisedb-*インデックスの内部名*」のテンプレートについての詳細は、第 4 章を参照してください。

インデックスの追加

「インデックス一覧」画面の「新規追加」ボタンをクリックすると、「新規インデックス追加フォーム」が表示されます。

DB スパイダがインストールされると、以下の項目が影響を受けます。

コンテンツ種別

DB スパイダがインストールされ正当なライセンスを保持していると、この欄が表示されます。

データベースを対象とするインデックス (コンテンツ種別が「DB」) を作成するときには、「データベース用」のチェックボックスをオンにする必要があります。

第 3 章　DB スパイダ管理画面

DB スパイダの設定

DB スパイダの設定は、以下の流れで行います。

1. 「データベース指定」欄に必要事項を入力して、「接続テスト」を実行する
2. 接続テストが完了したら、「テーブル情報取得」をクリックしてテーブル一覧を取得する
3. 「テーブル・列選択」欄の「検索対象テーブル」から対象テーブルを選択して「列情報取得」ボタンをクリックし、カラムを取得する
4. 「テーブル・列選択」欄に必要事項を入力して、「検索結果一覧情報取得」をクリックする
5. 「検索結果一覧画面設定」欄に必要事項を入力し、「保存」ボタンをクリックして保存する

データベース指定

ここでは、データベース接続情報を設定します。
入力されるデータは、Perl の DBI モジュールのデータベース接続で使用される値です。

データベース種類

インストールされている DBD ドライバが一覧表示されます。

現在は、DBD::mysql、DBD::Pg、DBD::Oracle の 3 種類のうち、インストールされているものが一覧表示されます。
一覧から 1 種類ドライバを選択してください。

MySQL **使用時の設定画面例** :

PostgreSQL **使用時の設定画面例** :

Oracle **使用時の設定画面例** :

データベースホスト名

接続するデータベースのホスト名か IP アドレスを入力します。必須入力です。

例) localhost

ポート番号
データベースに接続する際に利用するポート番号を入力します。
ここが空の場合、各 DBMS のデフォルトポートを利用します。

例) 5432

ユーザー名
データベースに接続する際に利用するユーザー名を入力します。必須入力です。接続にパスワードが不要な場合、「パスワードなし」をチェックしておくと、以後、パスワード入力画面をスキップできます。

例) username

データベース名
接続するデータベースの名前を入力します。必須入力です。
Oracle を使用する場合は、ここに SID 名を入力します。

例) dbspider

その他のオプション
DBI モジュールの connect() で "options=xxxxxxxx" で設定する部分をここに記述することができます。"options=" は不要で、値のみ記述します。

例) -B 4096

MySQL を使用する場合、DBI モジュールの connect() で設定するオプションをここに記述することができます。

例) mysql_ssl=1;mysql_connect_timeout=15;

文字コード
テーブル名、列名に 2 バイト文字が使われている場合、ここで文字コードを指定します。半角英数字のみの場合は、ascii のままで問題ありません。
なお、ここで指定する文字コードはテーブル名、カラム名についてのみで、実データの文字コードとは無関係です。

上記項目を入力した後、「接続テスト」ボタンをクリックすると、確認画面が表示されます。

ユーザー名

前画面で入力したユーザー名が表示されます。

接続文字列

前画面で入力した文字列が DBI モジュールの connect() の引数の形式になって表示されます。

パスワード

DB 接続のパスワードを入力します。
前画面で「パスワードなし」をチェックしている場合、ここに入力欄は表示されません。

上記項目を入力・確認後「実行」ボタンをクリックすると、データベース接続を試みます。

接続が成功すると「接続に成功しました」というポップアップウィンドウが表示されます。

「OK」をクリックすると入力画面に戻ることができます。

接続に失敗すると、エラーメッセージが表示されます。

ここまでの記入例を使う (「その他のオプション」を除く) と、connect() の引数は以下のようになります。Perl DBI モジュールに精通されている方はご確認ください。

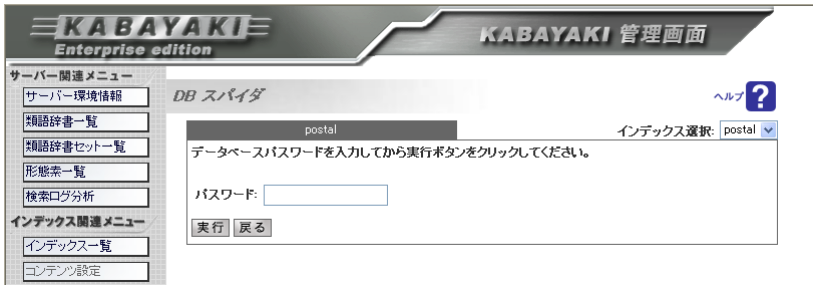
DBI->connect("dbi:Pg:dbname=dbspider;host=localhost;port=5432", "username", "password");

※ Oracle の場合は異なります。
DBI->connect("dbi:Oracle:host=localhost;sid=dbspider;port=5432", "username", "password");

テーブル情報取得

接続テストが成功したのを確認できたら、「テーブル情報取得」ボタンをクリックします。

パスワード入力画面が表示されるので、パスワードを入力し、「実行」ボタンをクリックすると、テーブル一覧を取得できます。



ただし、「パスワードなし」を選択している場合はパスワード入力画面は表示されません。

テーブル・列選択

ここでは、テーブルと列に関する設定を実行します。

検索対象テーブル

「テーブル情報取得」ボタンをクリックすると、データベースからすべてのテーブル名を取得し、ここに一覧表示します。
ここで、検索対象としたいテーブルを選択し、「列情報取得」ボタンをクリックします。

パスワード入力画面が表示されるので、パスワードを入力し、「実行」ボタンをクリックすると、列一覧を取得できます。
ただし、「パスワードなし」を選択している場合はパスワード入力画面は表示されません。

検索対象列

右側の列一覧の中から、全文検索の対象にしたい列を選択し、追加ボタンをクリックすると、左側の一覧に選択された列が表示されます。
左側の列一覧から列を削除したい場合は、列を選択し、削除ボタンをクリックします。
一覧は、Ctrl + クリック、Shift + クリックで複数選択することができます。
必須入力です。

検索結果列

右側の列一覧の中から、検索結果画面に表示したい列を選択し、追加ボタンをクリックすると、左側の一覧に選択された列が表示されます。
検索結果画面に表示される列の順番は、ここで設定された順番と同じになります。必須入力です。

データ更新の判定の元になる列

データベースのデータ更新時に更新される列を選択します。
型が DATE 型または TIMESTAMP 型の列のみが選択対象になります。
必須入力です。

データ削除の判定の元になる列

データの削除フラグとなる列を選択します。必須入力です。

削除とされる値

削除フラグの値を入力します。必須入力です。

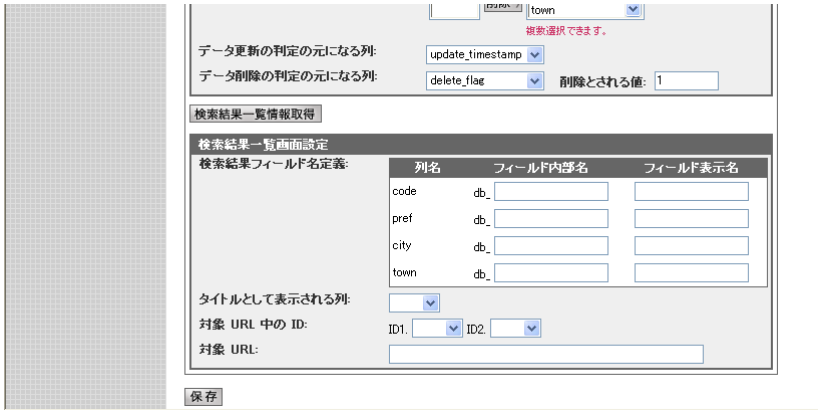
上記項目を入力した後、「検索結果一覧情報取得」ボタンをクリックします。

パスワード入力画面が表示されるので、パスワードを入力し、「実行」ボタンをクリックすると、「検索結果列」で設定された列が「検索結果一覧画面設定」欄に転記されます。

ただし、「パスワードなし」を選択している場合はパスワード入力画面は表示されません。

検索結果一覧画面設定

ここでは、Kabayaki Enterprise 検索結果画面に関する設定を実行します。



検索結果フィールド名定義

- 列名
  検索結果列として指定された列が指定順に表示されます。
- フィールド内部名
  列が Kabayaki Enterprise 内部で扱われるときの名前を決めます。
  半角英字と _ のみ使用できます。
  列ごとにユニークである必要があります。
  指定された名前の前に、強制的に db_ という文字が付けられます。
  必須入力です。
- フィールド表示名
  検索結果を表示するときの列の名前を決めます。
  全角文字も入力できます。
  列ごとにユニークである必要があります。
  必須入力です。

タイトルとして表示される列

検索結果画面のタイトルとして表示される列を指定します。
必須入力です。

対象 URL 中の ID

検索結果画面からのリンク URL に埋め込まれる値を指定します。
2 種類選択できますが、1 つだけでも問題ありません。

対象 URL

検索結果画面に埋め込まれるリンク URL を入力します。「対象 URL 中の ID」の値を埋め込みたい場合は、

[ID1]、[ID2]

と表現します。

例）http://xxxxx.co.jp/index.cgi?id=[ID1]

上記項目を入力した後、「保存」ボタンをクリックします。

パスワード入力画面が表示されるので、パスワードを入力し、「実行」ボタンをクリックすると、設定データが保存されます。

ただし、「パスワードなし」を選択している場合はパスワード入力画面は表示されません。

第 4 章　検索用テンプレート

検索ページテンプレート

特定のデータベース用インデックスを対象とする、専用の検索ページテンプレートが、「DB スパイダ」設定画面で設定を保存した時点で作成または更新されます。

検索ページテンプレートの生成のために使用される設定情報は、以下の通りです。

- 文字コード
- 検索結果フィールド名定義
- タイトルとして表示される列
- 対象 URL 中の ID
- 対象 URL

テンプレートファイルの内容と、「DB スパイダ」設定画面の「検索結果一覧画面設定」の対応は以下のようになります。

検索結果一覧画面設定	検索結果画面
フィールド表示名	一覧の各項目のタイトル部分
タイトルとして表示される列	一覧の各データのタイトル部分
対象 URL	参照 URL

たとえば「検索結果一覧画面設定」に次の図のように設定されていれば、「フィールド表示名」は「郵便番号」、「都道府県」、「市区」、「町村」で、「タイトルとして表示される列」は code (郵便番号)、「対象 URL」は
http://timedia.co.jp/index.cgi?id= *郵便番号*
です。

DB スパイダの設定画面上で「保存」ボタンをクリックすると、その設定に応じたテンプレートが生成されます。このテンプレートの名前は「enterprisedb-*インデックスの内部名*」になります。たとえば、インデックスの内部名が postalcode のときは、enterprisedb-postalcode という名前のテンプレートが自動的に生成されます。

生成されたテンプレートを検索結果画面に使用するためには、「サーバー環境情報」画面の「検索ページテンプレート」のプルダウンメニューで「enterprisedb-*インデックスの内部名*」のテンプレートを選択します (第 2 章を参照してください)。

前述の例の設定で生成されたテンプレートを使用した検索結果画面の項目表示の例が次の図です。

DB スパイダ設定画面の「検索結果一覧画面設定」で「タイトルとして表示される列」に指定されていた code (郵便番号、上の図では 1600002 等) が一覧の各項目のタイトル部分として表示され、「フィールド表示名」として設定されていた「郵便番号」、「都道府県」、「市区」、「町村」が、各データのタイトル部分として表示されています。「対象 URL」の指定は、「参照 URL」の部分に反映されています。

第 5 章　アンインストール

DB スパイダと関連パッケージの削除

DB スパイダのアンインストールも、インストールと同様にスーパーユーザーの権限で実行してください。

kabayaki-dbspider パッケージのアンインストール

以下のコマンドを実行して kabayaki-dbspider パッケージをアンインストールします。

```
# rpm -ev kabayaki-dbspider
```

さらに、必要であれば、DB スパイダが依存しているソフトウェアもアンインストールします。ただし、DB スパイダ以外のパッケージが依存していることもあるため、アンインストールする場合は、依存関係に注意してアンインストールしてください。

```
# rpm -ev パッケージ名
```